

いかこい

平成24年度
第1号
発行NO.33

おめでとう

平成24年度「まつえ市民大学」の入学式が行われ、374人が入学した。今年のテーマは「歴史をつなぐ文化力」で、先人が創りあげてきた文化や歴史を学ぶと同時に地域の魅力を再発見し、私達に何が出来るかを学習する。新入生は、生涯学習の場で積極的に学び、人生を楽しく心豊かに過ごすことを誓った。

自ら学び学習成果を地域で生かす！



今年の新生は、9コーズに分かれて学習する。式辞で福島学長（写真右）は、「今、市民の自主独立が叫ばれる中、市民大学

にあつても行政主導でなく市民が主体となった『まつえ市民大学』を作っていくことを目指し、平成25年度からは市民の皆さんが運営する新体制にするように準備を進めている。

受講生の皆さんは、自ら学び、



新入生代表米井美弥子さんが「基本理念をモットーに明るく元気に学んでいきます」と決意を述べた

まつえ市民大学元学長の吉川通彦さんが来賓者を代表して「東日本大震災から一年余りが過ぎ、その中で強く言われてきたのが人と人の絆でした。まつえ市民大学の基本理念である自分づくり・仲間づくり・地域づくりが今まで以上に大切な時代になった。受講生同士の絆を大切にするとともに卒業後も地域の核として活躍してほしい」と祝辞を述べた。



まつえ市民大学のリーダーの多さは学びの強い意欲の表れと吉川さん

「パイプオルガンは風の楽器、流れてくる風を感じて欲しい」と米山さん。最初に、パイプオルガンとチェンバロの演奏を聴き、



米山さん(左奥右から2人目)の指導でパイプオルガンを初体験

パイプオルガンはホールに合わせて造られ、同じものはない。ふいごで風を送り鍵盤操作でパイプが鳴る。オーボエやクラリネットなど様々な楽器の音色が出せ、それを組み合わせた演奏になる。風のオーケストラと言える米山さん。オルガンの歴史は紀元前2000年にさかのぼる。楽器は東洋と西洋が交わるイスラム圏で生まれると言う。シルクロードを渡ってきた風の音色に心安らぐ時を過ごしたと受講生は感想を述べた。

その日学ぶ野菜の性質や育て方のポイントについて先ず座学で学ぶ



苗の定植と支柱立て、敷きわらについて、講師から指導を受ける



わき芽の取り方、誘引の仕方、子づるの摘芯などについて体験する

風のオーケストラ

音楽コース プラバホールでのオルガニスト 米山麻美さんにパイプオルガンの魅力について話を聴き、その仕組みや構造を学び、楽器を弾くことも体験した。

「日本は700年単位で国づくりを行ってきた。今は第3期の国づくりの途中であり、この時期に古事記を見つめ直すことは大いに意義がある。現代は8〜9世紀と似ている。今の日本人は心に忘れ物をして、それを直すためには、



日本は伝来したアジア文明の果たす役割を考へるべきと中西さん

入学式記念講演

奈良県立万葉文化館館長の中西進さんが「いにしえの日本人の心」と題して、入学式記念講演を行い、今の世の中に対する人々の心の有り様(よう)を述べた。

いにしえに学ぶ心の有り様

いにしえから伝わる日本語の意味を正しく理解することが必要。昔は「今」と対比して時間が区切られるが「いにしえ」は今も生き続けている昔のこと。余韻を持った言葉であり、こういう言葉の感覚を大切にしなければならぬ」と述べた。「たまきはる」「とこしえ」などの言葉をあげ、いにしえ人は無限、永遠を重要視し、その先に不変なるものがあると信じていたと語り、「あきらめる」事柄を明確にする。「幸い」花が咲き広がること」などを例に、言葉は抽象的でなく具体的なこととがらに属して考えることが必要という。はじめに言葉ありき、言葉によつて事柄ができてくる。この、いにしえの人が持っていた心の有り様を、今の日本人は学んで行動すべきだと説いた。



取れたてのキュウリを味わい、岸本施設長から収穫時期のポイントを教わる受講生

農業コース

作る喜びを実感

土づくり・野菜づくり、稲作まで

キュウリ・ナス・トマト・さつま芋などの夏野菜、植え付けから収穫まで、生育状況に応じたその時々々の管理方法を、やくもアグリパークの岸本施設長・石野講師から座学と実習で学んでいる。既にキュウリやトマトなどは収穫期を迎え、受講生は日々の育成管理にも力が入る。

連休明けに定植したキュウリ、トマトなどの夏野菜は40日余りたった6月中旬には大きく成長した。「キュウリの誘引は8の字に余裕を持たせて結束する。下部のわき芽は取り除き、子づるは2節を残して摘芯する。これは込み合う

ので、それ以降の実付きが良くなる」など、品種に応じた栽培方法や病気対策など具体的な日常管理の方法を座学と実習で学んでいる。受講生は家庭菜園で育てているカボチャやゴーヤでのグリーンカーテンの作り方などの疑問などを熱心に質問していた。(中島)

出雲はわけても神々の国

古事記が編さんされて1300年。松江歴史館館長・藤岡大拙さんが「古事記の中の出雲神話」と題して講演し、古事記、出雲国風土記に書かれた神話の世界を語った。



出雲神話は古里の財産、子供たちに語り聞かせよう藤岡さん

シニアいきがい・発見 コース

小泉八雲は『日本の面影』の中で「出雲はわけても神々の国」と表現している。出雲にはたくさん神々がある。出雲国風土記(733年)には399社もある。古事記(712年)の上巻の3分の1が出雲神話であることでも特別な地域だった。国引き・黄泉の国・オロチ退治・因幡の素戔・国譲りが有名だ。

黄泉の国の神話ではイザナキノミコトが黄泉の国から逃げ帰ると記されている。その子の乱暴も追いつけず、高天原の国へ降り立ち、そこで退治したのがヤマタノオロチ。スサノオノミコトの子孫がオクニヌシノミコトで国譲りの神話。神々が織り成すドラマの舞台はまさに出雲である。

「神話博しまね」は7月21日から古代出雲歴史博物館敷地内を中心に開催される。市民として盛り上げ、観光などで訪れた人にもてなしの心で接して欲しいと語った。(日野・和田森)

「外の目」が見た島根の魅力

ふるさと発見 コース

開星中学・高校教諭ダスティン・キッドさんが「『外の目』が中に入って見えた島根の文化」と題して講演した。島根に住み、生活してどのように感じたのか日常の中の出来事を語った。



なめらかな日本語で、体験談や文化の違いを語るキッドさん

米国アイダホ州出身で、学んでいた大学で日本語を専攻。日本の姉妹校の一つの島根大学に1998年留学し本格的に日本語を学んだ。外国語指導助手の資格を取得し、広瀬町、出雲市、室蘭の学校

で英語を指導し、また縁があり2008年再度松江の地に住むことになった。「空気の匂いが良く海が近い、温泉も沢山あり人々はよく挨拶をする。神社に参拝すると気持ち癒される。これらの雰囲気は自分の感性に合う。神々が集まる神在月があるのは非常に興味があり影響された。大田市の物部神社に参拝したことがきっかけで全国の「一の宮」を全て参詣した。表日本の都市はどこも同じ感じがする。不便さが残っている故に島根には日本らしさが残っている。たたら製鉄、歌舞伎、神話など日本史のルーツがある。昔と近代の雰囲気融合しミステリアスで神秘的」と語った。体験から日本や島根の魅力を紹介した「おーい元氣か」(島根日日新聞社刊)を出版した。(備谷・日野)

里山を切り撮る

美術 コース

出雲国風土記で宍道の地名の由来となった猪石がある石宮神社を訪ね、里山の風景と合わせ、成相吉堯先生の指導で写真撮影を行った。



巨石の前で熱心に写真撮影する受講生

講義でカメラの持ち方、構図の決め方などの基礎知識を聞き、一

路宍道町へ向かった。

神社の由来について事務局の五百川さんが車中で説明。オオクニヌシノミコトが犬を使って猪狩りをした。追われた二匹の猪と犬は石となって今も残っている。この猪の通った道、猪(しし)の道から宍道(ししじ)＝しんじ、と呼ぶようになったと言われる。石宮神社にはこの猪と犬の3体の大岩がある。

神社の約1km手前でバスを降り、田んぼの道を里山風景を撮りながら歩いた。早苗も少し伸び、風に吹かれる様や、アザミやホタルブクロ、水を張った田んぼに映る山の姿にシャッターを切る。神社では横たわる巨石をどう切り撮るか、成相さんから「主題を定めて構図を決める」と指導を受け受講生たちの試行錯誤の苦戦が続いていた。(須田・米井)

ふるさとづくりコース

白濁歴史まち歩き楽会事務局局長の仁田玲江さんの案内で、松江大橋南詰の一角に残る小路(しよじ)や現存する建物などを巡った。

現在の区分で、9号線付近から北、賣布神社付近から西(宍道湖側)、そして大橋川までのエリアが白濁と呼ばれていた。松江開府後は、宍道湖や大橋川の水運を利用し、商人の街として経済の中心となっていた。豪



白濁の小路には7種類の散策コースができていると仁田さん

城下町の小路めぐり

商屋敷もあり、にぎわった当時の小路が今も残っている。当時使われていた小路の名前を整理し、町の様子を記した



「白濁街歩きあんない」や「白濁小路」などの資料を住民組織が作った。経済、匠の技、神社仏閣、和菓子など、多くの文化が残っているこの地域も、いろいろな苦難を乗り越えて

合銀展望台から白濁全体を見る。今があると仁田さんは語る。江戸時代の銘菓も廃藩によ

る城下町の衰退と共に姿を消したが、明治時代に住民により、よかんや山川、若草が復活し、今では京都、金沢と並ぶ和菓子文化が栄えている。



今も生活道路の伊野屋小路

小路の名前には、店名の付いたものが多い。変わった名前では「座頭小路」がある。歴史も古く、昔住んでいた座頭が殺され、夜な夜な笛の音がする。近所で霊を弔ったら笛の音が消えた。そこからこの名が付き、子供たちの肝試しの場所だった。仁田さんは語り継がれた町並みをゆっくりと歩き、歴史と文化を体感して欲しいと語った。(川本・坂本)

伝統の技を体験

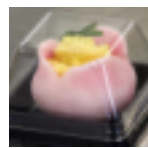
シニアいきがい コース

高見一力堂の代表取締役・高見雅章さんが「和菓子あれこれ」と題してお菓子の歴史を話され、その後和菓子作りを体験した。



各テーブルをまわり、あんを包む技を教える高見さん

松江は7代藩主不昧公でも有名なお茶処、お菓子処であり、昔から人々の生活に溶け込んでいる。一力堂の歴史は古く、1751



年江戸中期に松江で開業し松江藩御用達をしており、「姫小袖」はお留め菓子だった。当

時の歴史を知るものとして、「菓子方書」「御菓子直伝帳」が残されている。お菓子の歴史、商品の材料や製法などの講義を聞いた。場所を調理室に移し、和菓子作りに挑戦。手のひらに湿り気をつけ、薄いピンク色の皮と濃いピンク色の皮を重ね中央にあんを乗せやさしく包む。すると淡いピンクのグラデーションが現れる。次に三角木型で中央を押し、指先で花びらを作り、黄玉のおしべを乗せ、ようかんで作った葉を取り付けて「牡丹の花」が完成した。

高見さんは、松江の和菓子は自然のグラデーションが特徴と語り、受講生は、その技を経験した。(米井・川本・須田)

ティータイトム

受講生の皆様

入学おめでとうございます。

まつえ市民大学は来年からリニューアルします。そのための検討会議が始まっています。市民による市民のための市民大学を目指し、組織や講座運営も市民の手にかかれます。私たちは、受講するだけでなく、今、あるいは将来何が必要かを常に考え、自分づくり、仲間づくり、地域づくりに能動的にかかわって行かなければ、子供の世代に渡せる文化は生まれてきません。サポーターの会も仲間を募集しています。皆さんの積極的な参加で、楽しい市民大学をみんなで一緒に作り上げましょう。(W)編集担当まつえ市民大学レポーター 問い合わせ先

松江市民活動センター
まつえ市民大学事務局
Tel 0852(32)08994
Fax 0852(32)0847
メールアドレス
mcu@city.matsue.lg.jp